

## イサベルが愛した街 セゴビア

Text & Photo by Masakazu NAKADA

朝食を急いで済ませた僕は、明るくなってきた空にせかされながら、ホテルからスペイン広場へと向かう。ほどなく待合せ場所から乗り込んだツアーバスは、マドリッド市内の渋滞を抜けると高速道路を快適に進む。日帰り旅の始まりだ。目指すセゴビアはマドリッドの北西約100km、約1時間半のドライブである。

到着までの間に、セゴビアについておさらいをしておこう。一般的には、ローマ時代の水道橋やディズニーのモデルになったお城（アルカサル）が有名だが、実はスペイン建国に重要な意味を持つ街である。

セゴビアは古代にケルト・イベリア人が築いた街で、その後ローマ帝国に支配された。ローマ帝国の滅亡後、イベリア半島は西ゴート王国が支配しカトリックが信仰されるが、8世紀になるとイスラム勢力が西ゴート王国を滅ぼし、キリスト教徒はイベリア半島北部に追いやられてしまう。1083年にカスティーリャ王国がイスラム教徒から街を奪回。以後、セゴビアはカスティーリャ王国の重要な拠点となり、イスラム勢力からキリスト教徒にレコンキスタ（国土回復運動）を完成させた主人公・イサベル女王と、夫であるアラゴン王フェルナンドが共に統治するようになった。1474年12月13日にイサベルが戴冠したこの地こそ、カスティーリャ王国の歴史が始まる場所なのだ。

バスは快適に進む。気づくと、高速道路を降り、市街地への坂道を下り始めていた。「セゴビアの旧市街」は2つの川に挟まれた高台にあり、そこを目指して進んでいく。そろそろ到着という時、バスは街を迂回し、北端にあるアルカサルを下から見上げる芝生の広場で停車した。

「ここから見上げるのが一番きれいなんだぜ」、とガイドが言う。

なるほど、エレスマ川とクラモレス川が合流した花崗岩の上に立つアルカサルの全容が実に見事だ。その美しさから、ディズニー映画の白雪姫城のモデルとなったことに納得！



花崗岩の上に立つ、アルカサル(城)の全容

しばし写真タイムとガイドとの雑談を楽しみ、午前中だけ見ることができる陽に輝くアルカサルを堪能したら(内部はお預けにして)、いよいよ水道橋の真下、城壁の東に開けたアソゲホ広場を目指す。

バスが広場に近づくにつれ、水道橋がグングン大きくなっていく。バスはその水道橋の手前で停車した。バスを降り立った僕は、数歩進んで、足元から空に伸びる水道橋を思わず見上げた。



バス停から見た水道橋



水道橋建設2000年を祝いローマ市が贈った  
“狼の乳を吸うロムルスとレムスの像”

この水道橋は1世紀後半、ローマ帝国のトラヤヌス帝によって築かれ、市民の給水源として19世紀まで実際に使用されていた。「セゴビアの旧市街」は舟の形をした高台にあり、その手前が低く谷間になっている。水道を引くため、高台の丘と旧市街とを結ぶ谷間部分に、水道橋が造られたのだ。

水道橋の規模は、高さ28mで8階建てのビルに相当する。長さは813m。しかし橋脚の幅は2.4mしかない。中央は2層のアーチからなり、両端は1層。柱の数は120本で、アーチは166箇所。凄いのはセメントや漆喰を用いず、単に石を積んだだけということ。水源であるグアダラマ山脈からセゴビアまでの総延長距離は、約18kmにも及ぶそうだ。

以前訪れた「ポン・デュ・ガール」の三層アーチ構造の圧倒的な姿(長さ275m、高さ49m、下層幅6m)とは対照的で、なんとも頼りない印象。ペラペラで～す(^\_^)。



水道橋 広場の真ん中に聳え立つ



世界遺産のエンブレム

さてさて、水道橋の悪魔伝説をご存じだろうか。

むかしむかし、谷の向こうの泉まで水を汲みにいくのが大変だった美しい娘が、悪魔に言いました。

「水を運ぶ橋を一晩で作ってくれたら、あなたのお嫁さんになるわ」

悪魔は喜んで懸命に石を運び、その夜のうちに水道橋を作り、最後の石をはめ込むところで

「もう夜があげたわ、約束が違うわよ」と娘が叫びます。

夜しか活動できない悪魔は、あわてて姿を消しました。

……というお話し。(所説あり)

水道橋は、とても人間技では不可能、きっと悪魔が造ったのだ、という、この手の話は世界中にあって、耳タコである。しかも、どの話も結局は女性が悪魔を騙すエンディングで、ちょっぴり悪魔に同情してしまう。ちなみに、悪魔が最後にひとつ積み残した部分には、現在、聖母マリア像が納まっている。行かれる時はチェックを忘れずに。



渡ることはできないが、上まで登ることはできる



水道橋の上部に聖母マリア像が納まっている

水道橋を堪能したら、ここからは徒歩で街を楽しもう。その前に、広場の横にある観光案内所に立ち寄り、日本語の地図を貰う。街全体を把握できるジオラマもあるし、トイレも利用可能(有料20セント)。



無料の日本語マップ



↑ アルカサルは街の突端



↑ 線で表示された水道橋

それでは、旧市街を目指そう。

旧市街は街全体が城壁に囲まれた小高い丘にあり、水道橋から緩やかな坂道を上る。ローマ時代に繁栄し、中世後期に全盛期を迎えたと言われているセゴビアは、当時の面影を色濃く残す旧市街全体が世界文化遺産である。

『セゴビア旧市街と水道橋(Old Town of Segovia and its Aqueduct)』は、登録基準(i)、(iii)、(iv)で1985年に世界遺産リストに記載された。水道橋は、人類の創造的才能を表現する傑作であり、技術の集積。ローマ時代から続く旧市街は、消滅した文化的伝統と人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群の優れた例である。



マンホール蓋もセゴビア仕様



この下に水道橋からの水が流れるという道路の印

旧市街のすり減った石畳や建造物を、歴史の軌跡を辿るように、アルカサルまでの道を進む。街を歩いているだけで、イサベルの時代にタイムスリップしたような錯覚が気持ちいい。三方を断崖で囲まれる旧市街。アルカサルの建つ場所は高さ100mほどの花崗岩の上にある。古城に近づくにつれ視界が開け、高台から見下ろす街並みや、その先に広がる牧歌的な風景との対比が美しい。

いよいよアルカサルだ。

スペイン語で「城」という意味の「Alcazar」、アラビア語では「宮殿」や「砦」という意味もある。アルカサル前の広場から全体を臨むと、崖に囲まれていることが良く分かる。まさに、天然の要塞。窓の少ない外観も要塞そのものだ。城門までは跳ね橋を通して入るのだが、この下は断崖絶壁。怖いもの見たさで見下ろすと、変な感覚が襲う。難攻不落を実感しながら、先ほどお預けにしたアルカサルの内部へと、いざ行かん！



旧市街側からのアルカサルの眺望



跳ね橋の下は断崖絶壁!!

ここで、南・北・西の三方を断崖で囲まれた天然要塞アルカサルの、あるある。  
地下に秘密通路があるとかないとか……、探検隊の出番です。

入ってすぐは、武器の広場となっている。ここには騎士たちの武具が磨き上げられ、展示されている。内部には「王座の間」、「ガレー船の広間」、「諸王の広間」などがあり、美しいステンドグラスや天井装飾が施されている。また、礼拝堂にあるイサベル時代のもとの飾り衝立も圧巻である。

「王座の間」では、天蓋付きの玉座がお目見えする。繊細な彫り物が施された一对の椅子の背景には、カトリック両王の紋章。そして天蓋部分には、両王の共同統治体制のスローガン「*TANTO MONTA* (両王が相等しい権限を持つ)」が刺繍されている。



手入れされた武具、今でも使えそう



両王の玉座

「ガレー船の広間」は、天井の形が船底(逆さまの船体)に似ているため、こう呼ばれる。奥にある壁には、マヨール広場で行われたイサベルの戴冠式の模様が描かれている。



壁に描かれたイサベラの戴冠式の模様(天井が見事)



礼拝堂内にある飾り衝立

「諸王の広間」では、レコンキスタの開始者であるアストゥリアス王国のペラーヨから、イサベルの娘フアナまでのスペイン歴代王の彫像が壁の上部にぐるりと並んでいる。この歴代王の彫像と、ムデハル様式の木細工で覆われた独特な装飾は圧倒的な美しさだ。



歴代国王の彫像



暗い室内に窓から陽が差し込み幻想的

突然ですが、ここで問題。

*イサベルが女王に即位して、最初に手掛けたことはな〜んだ？*

正解は、水道橋の修復。

11世紀にイスラム教徒の攻撃で一部が破壊された事もあり、水道橋上部の修復を命じた。なぜなら、アルカサルまで水道が引かれており、街への水供給は急務だったのだ。この部分は石材が違うので、イサベル女王時代に修復されたと分かる。

ついでに、名前あるある。

*イサベルとその夫のフェルナンド。*

*フェルナンドは、自国のアラゴン王としてはフェルナンド2世だが、*

*妻イサベルのカスティーリャ王国の王としてはフェルナンド5世である。*

それでは、アルカサルを後に水道橋のあるアソゲホ広場に戻ろう。

おっと、ゴシックの最高傑作、セゴビア大聖堂を忘れるところだった。

セゴビア旧市街の中心マヨール広場にある大聖堂は、16世紀から200年かけて18世紀に完成した。当時、既に普及していたルネサンス期の建築物にも拘らず、バロック、ネオ・クラシックのエッセンスも取り入れたスペイン最後の後期ゴシック様式の教会だ。イサベルが戴冠式を行ったマヨール広場に建つこの大聖堂。ゴシック様式ながら内部装飾は控えめであること、スカートの裾を広げたような気品ある外観から「大聖堂の貴婦人」と呼ばれている。



アルカサル内部の庭園



大聖堂の貴婦人(外観)

世界遺産にどっぷり浸っていても、お腹は空く。歩き疲れたし、そろそろランチ休憩にしよう。

事前に調べたところ、セゴビアの名物料理は何と言っても、子豚の丸焼き(コチネージョ)だとか。ランチには高めの値付けながら、子豚のうまそうなディスプレイが出ている店に入ってみた。コチネージョを注文し、出てきたサラダを頬張りながら、しばらく待っていると、子豚ちゃんが登場。

本当に丸焼き！

肉の柔らかさが分かるよう、ナイフではなくて、お皿を使って丸焼きを切り分けていく。しかも、切り分けに使ったお皿を、客の目の前で床に叩きつけて割るパフォーマンス付き。外の皮がパリッパリ！でも中はとろける柔らかさ。この食感と適度な塩味で美味しく、うう～完食してしまった。ちなみに、切り分けに使った皿を割る風習は、“幸運をもたらす動作”と考えられている。



吸い寄せられるように入ったレストラン



子豚の丸焼きは名物料理

中世の美しい城塞都市にローマ時代の遺構が溶け込んだ、古都セゴビア。

アラゴン王子フェルナンドと結婚して、現在のスペインを築いたイサベル。——コロンブスの新大陸進出を援助し、大航海時代以後の栄華を導いた女王。

ここセゴビアで、太陽が沈まぬ国と称されたかの地の、始まりを垣間見ることができる。

そのイサベル女王がどこに埋葬されているか、ご存じだろうか？

イサベル女王は1504年にバリアドリードで亡くなり、11年後には夫フェルナンド王が亡くなった。ふたりが眠る場所、それはレコンキスタを完成させた地、アンダルシア地方のグラナダだ。

市内のカテドラル(大聖堂)にある王室礼拝堂。そこには、イサベル女王とその夫であるフェルナンド王の石棺が、安置されている。それは決して華美ではないが、歴史を感じざるを得ない厳かな場所である。大理石で造られた棺の碑文には、「この女王と王は、マホメット教の宗派を滅ぼし、頑強なユダヤ人たちを打ち平らげ、それ故にカトリック両王と呼ばれる」と記されている。

イサベル女王は、実は親が決めた婚約者が嫌で、自分で見つけた相手、フェルナンドと駆け落ちした。そのロマンスがあってスペイン王国の祖となった、ふたり。718年に始まり1492年まで続いたレコンキスタを終わらせ、1496年にローマ教皇より「カトリック両王」という称号を授けられた、ふたり。そんな両王の墓所がここにある。仲良く眠る二人に会いたくなったら、アルハンブラ宮殿とともに、大聖堂に隣接する王室礼拝堂を忘れずに！

——と、最後に疑問が湧いてきた。

イサベルが本当に愛した街はセゴビア？ それとも、グラナダ？

その答えを知るのは、心からイサベルを理解し、一緒に眠る夫フェルナンドだけなのかもしれない。